吉野川の景観と文化にふれる２つの講演

特別講演「阿波藍の文化と歴史」

「阿波の藍か、藍の阿波か」と言われ、徳島藩の経済を支えた阿波藍。その歴史と特徴について、藍住町歴史館　藍の館館長・阿部利雄さんが、さまざまなエピソードを交えながら話してくださいました。現在、徳島で藍を製造しているのは5人。苗の種類、植え付けの時期などそれぞれ違うそうです。「どの藍師も自分が一番だと思って作っている。そう思わないとできないつらい仕事」という言葉に、世界を魅了するジャパン・ブルーの原点を感じました。

講師：阿部　利雄さん

基調講演「吉野川と橋」

半世紀にわたって国内外で橋の設計・架設に携わってきた脇川　弘さん。その専門知識を生かし、現在は徳島県立総合大学校とくしま学博士として活躍されています。講演では時代を代表する吉野川の橋について、デザイン、工法など技術者ならではの視点から楽しく紹介。特に昭和初期、三好橋、旧穴吹橋、吉野川橋という当時の東洋一クラスの橋が相次いで建設されたのは、徳島の技術力の高さを示していると誇らしそうに語ってくれたのが印象的でした。

講師：脇川　弘さん

「田舎の畦道にある」という素朴な魅力を生かしながら、遊歩道を整備したり、イベントを行うなど、新たな観光地としての整備を進めています。

「設置された感想ノートを調べると、まだ訪れた方がいない県が4つあります。宮崎県、島根県、高知県、そして徳島県です。ぜひお越しください（笑）」と江幡さん。

次男・筑後川の発表は、吉野川でもすっかりおなじみになったNPO法人筑後川流域連携倶楽部理事長・**駄田井正さん**。4県にまたがる筑後川流域には、世界有数の昇降式可動鉄橋である筑後川昇開橋、ラムサール条約に登録されたタデ原湿原、全国唯一の傾斜堰床式石張堰・山田堰など、多くの見どころがあります。その豊かな観光資源を生かし、筑後川流域連携倶楽部では筑後川フェスティバル、筑後川まるごと博物館など、さまざまな活動を行っています。駄田井さんが常々語っている「遊び」「学び」「仕事」を一体化させた取り組みです。今年は一歩進んで、「流域全体をひとつの都市としてとらえ、筑後川全体をブランド化していきたい」と、素敵な夢を語ってくれました。

吉野川の「藍」、そして「橋」をテーマに、2つの講演が行われました。どちらも徳島の誇る“にぎわい”。参加者から質問も相次ぎました

ご自分で染めた藍染めに身を包んだ司会の薮田ひとみさん。徳島の自然や文化についての豊富な知識はさすが！

そして、我らが吉野川の代表は、吉野川交流推進会議副会長・**中村英雄さん**。認定NPO法人 新町川を守る会の理事長として、率先して河川清掃や遊覧船の運航、川沿いの花植えなどを行い、川にいない日はほとんどないという中村さんにとって、にぎわいづくりとは「自ら動くこと」、そして「続けること」。平成2年、たった10人で始めた新町川を守る会も、はや29年。「活動を続けていると苦しい時もあります。でも、苦しいっていう時が楽しいんです。10年、20年、30年と続けていると、市民の見る目が変わってくるし、川も変わってくる。そうしたら、県や市、企業……必ずみんなが助けてくれます」と中村さん。水都・徳島市を代表する景観となった新町川が、その言葉を証明しています。「明日は全国からいらっしゃった皆さんを、遊覧船で新町川にご案内します」とにっこり。

川への想いを語り合った第1部に続き、第2部の交流会では、吉野川の育んだ自慢の「食文化」を堪能。そして、アスティとくしまで「秋の阿波おどり」を鑑賞していただきました。

川の個性も流域での活動も違いますが、交流を重ねることで互いの活動が活性化しているのを感じます。来年はどんな報告が聞けるでしょうか。今から楽しみですね。

パネルディカッションの様子。放っておいたら何時間でも語れる川のヌシたちなので、タイムキーピングが一番の課題です（笑）

アスティとくしまで開催されていた「秋の阿波おどり～阿波おどり大絵巻～」に兄弟たちをご案内しました。照明・演出などを凝らした絢爛豪華な阿波おどりに、すっかり魅了された様子でした